

大学生における精神的自立に関する研究 — 他者に対する必要性・期待・満足度との関連から —

得能千代

問題と目的

「自立」について人がもつイメージは曖昧である。吉本(1984)、福島(1992)による「自立」イメージの自由記述調査によると、独立することと、他者と融合的な関係を生き維持することの両方が存在している。果たしてこの2側面は個人の自立を記述するものとして両立するのであろうか。例えば比較心理学では、これと似た2側面「相互独立性」、「相互協調性」を独立して測定する尺度が作成され(高田・大本・清家:1996)、個人差を記述できるものとして発達的な検討もなされている(高田:1999, 2001)。伊藤(1993)は社会化と個人化の発達を検討するなかで、2側面のバランスという視点が重要であることを示唆している。

そこで、本研究では個人の内的な成熟としての「精神的自立」を、「個」としての側面と「関係」としての側面からとらえることを試みたいと考えた。本研究における精神的自立を“「個」としての自己と「関係」のなかにある自己を両方発達させ、バランスよく統合している状態”と仮定し、「個」と「関係」それぞれの側面の高さやバランスの観点から、その組み合わせによってどのような大学生が存在するのか、検討することを本研究の第1の目的とする(研究1)。

精神的自立についてのこの仮定では、精神的自立に向かって発達する過程で良好な関係が内在化され「個」と「関係」のバランスがとれているならば、両側面はより適応的な状態に至らしめるよう相互補完的に作用するものとする。まず、「個」が「関係」を補う機能として、困ったとき、ストレスフルな状況のときに実際に他者に動いてもらったり、そばにいてもらったりすることについてあまり期待しなくてすむのではないか。また、そうした状況下で自分に対する他者の態度がどうあれ、それについての満足度は低くないことが推測される。とはいえ、人間関係が欠かせないことも体験されており、「関係」が「個」を補う機能として、現実の人間関係の必要性も間接的・象徴的な形で感じられているのではないだろうか。そこで、研究1で「個」と「関係」の視点から分類した大学生の自立タイプと他者の何を自分にとって必要と感じ(必要性)、何を求め(期待)、満足しているか(満足度)という3点との関連を見ることを第2の目的とする(研究2)。

研究1—精神的自立の因子構造と大学生における類型の検討

方法

精神的自立質問紙: Kamitani(1993)により“自立”尺度を作成するために収集された49項目から成る質問紙。被調査者: 大学生(1, 2年生) 306人。うち男性は166人、女性は138人であった。

調査期間: 2002年11月、授業中に質問紙を配付、回収した。

結果と考察

(1) 「精神的自立」因子構造

因子分析の結果、まず10個の第一次因子「自己依拠」、「博愛」、「助け合い」、「場依存」、「対人敏感」、「対人不信」、「視野拡大」、「他者心情への敏感さ」、「自己明確」、「他からの批判許容」を得た。次に、この10因子をもって第二次の因子分析を施した結果、3因子「個の確かさ」、「気遣い」、「相互信頼」を得た。「個の確かさ」は本研究で定義した精神的自立を表す「個」の側面にあたり、「相互信頼」は「関係」の側面にあたるものと判断された。「気遣い」については、Kamitaniの「独立性」ではなく「個」としての自己の成熟を仮定することで、単に「反独立性」とみなされていたものが「気遣い」として弁別されたといえよう。この「気遣い」は谷(1997)の言う対人恐怖心性に近似しており、「個」-「関係」の対置におかれての葛藤に起因すると考えられる。すなわち「気遣い」は、「個」と「関係」2側面の関わり方を示すものとみなされるのである。そこで本研究では、個と関係の質を弁別的に解釈する意味で「気遣い」も含めて精神的自立因子とした。

(2) 「個の確かさ」、「気遣い」、「相互信頼」による回答者の分類

まず、3因子を抽出するために用いた10個の第一次因子合計得点を標準化し、WARD法によるクラスタ分析を行ったところ、5群が抽出された。この群間で「個の確かさ」「気遣い」「相互信頼」についてF検定をおこなったところ、3因子全てについて群の差が有意であった。1群は「相互不信・気遣い」群、2群は全て低い「個不全・相互不信・低い気遣い」群、3群は「個確か・低気遣い」群、4群は全て高い「個確か・相互信頼・気遣い」群、5群は「個不全・相互信頼」群といえる。本研究で

仮定した精神的自立の状態（「個の確かさ」「相互信頼」が共に高いタイプ）の大学生は「気遣い」も高いという結果が得られた。中期まで個人化と社会化は発達を続けていることを考えると、大学生はその途上であり、「気遣い」は両側面の成長に伴い大学生に見られるものであることが推測された。

研究2—精神的自立と他者に対する必要性・期待・満足度との関連

方法 精神的自立質問紙調査と同時に、他者に対する必要性・期待・満足度を測定するための質問紙調査を実施した。

必要性の測定：森定（1999, 2000）の「慰める存在」と「慰められるときの気持ち」に関する質問紙を用いた。本研究では慰める存在を現実の人間関係に限定するため、文章に若干の修正をした。「慰められるときの気持ち」は慰めの機能6項目についてどの程度必要と感じているか回答を求めるものである。

ストレス場面の設定：3つのストレス場面「授業・勉強のこと」、「自分のこと」、「友人・仲間のこと」を設定した。

期待の測定：3ストレス場面において他者にサポートを期待する程度を測定した。期待するサポート内容は、三浦・坂野・上里（1997）のコーピング尺度の“サポート希求”因子を用いた。

満足度の測定：3ストレス場面について、周囲の人の自分への接し方にどのくらい満足しているか回答を求めた。

結果と考察

必要得点、解決期待得点、共感期待得点について精神的自立5群×性別の2要因分散分析、さらに満足度について男女別に5群間でクラスカル・ウォリス検定をおこなった。その結果、「個の確かさ」と「相互信頼」が両方低い2群は他者に対する期待が低く、他者を必要と感じず、満足度も低い、という結果が得られた。「個の確かさ」と「相互信頼」のいずれかに拠っている3群・5群は他者に対する満足度は比較的高かった。すなわち個・関係どちらということではなく、いずれかの側面が高く保たれてさえいれば、他者への満足は保たれるといえる。「個の確かさ」も「相互信頼」も高い4群は、仮説に反して他者に対する高い期待をもっていた。しかし女性の4

群では状況に区別なく他者を必要とするのではなく、自然な状況での他者存在に対して「その人がいると」落ちつく、元気になる、慰められると感じられていることが示された。これは、与えられた状況からより大きな支持を得られているとみなされよう。概ね期待については相互信頼が高い4・5群が他群より高かった。個と関係の側面がどちらも尊重されず気遣いばかり高い1群には、いくつかの苦しさがみられた。まず、この群には慰めとなる存在をもつ人が少なかった。特に自分のことに関する悩み・ストレスについては周囲の人に慰められると感じにくく、人知れず苦しむ姿が浮かび上がった。さらにこのタイプの女性には、他者に返報性を求めてしまい満たされない傾向がうかがわれたのに対し、男性は女性に見られた返報期待や不満は見られなかった。男性の場合、他者に対する不満とは別領域に苦悩があるのであろうか。男性には個人としての成長がより求められる社会的役割割感を考慮すると、本研究では焦点をあてなかった個人内領域について充足されない面があるのかもしれない。精神的自立タイプにおける、個人内領域の充足のあり方についての検討が、今後の課題として残された。

総合考察

本研究では、精神的自立として想定された個としての側面を表す「個の確かさ」と関係としての側面を表す「相互信頼」に加えて、その両者の対置におかれて生まれると考えられる「気遣い」がみだされた。この3因子のバランスにより個人の精神的自立をとらえていくことを試みたのであるが、他者を過剰に気にする心性を表す「気遣い」は「個」と「関係」の両方の発達に伴うことがあり、そのアセスメントに際しては両者を高めるうえでの葛藤か、それとも両者が不確かゆえの葛藤か、という視点を持つことが重要であることが示唆された。しかしながら本研究で得られた知見はいまだ仮説生成段階であり、今後精神的自立を尺度により扱っていくには、それが真に妥当であることを確かめることがまず必要である。また、精神的自立を個の側面と関係の側面からとらえておきながら、本研究では他者に対する必要性・期待・満足との関連に限定していた。自身についての認知も確かめることは今後の課題である。